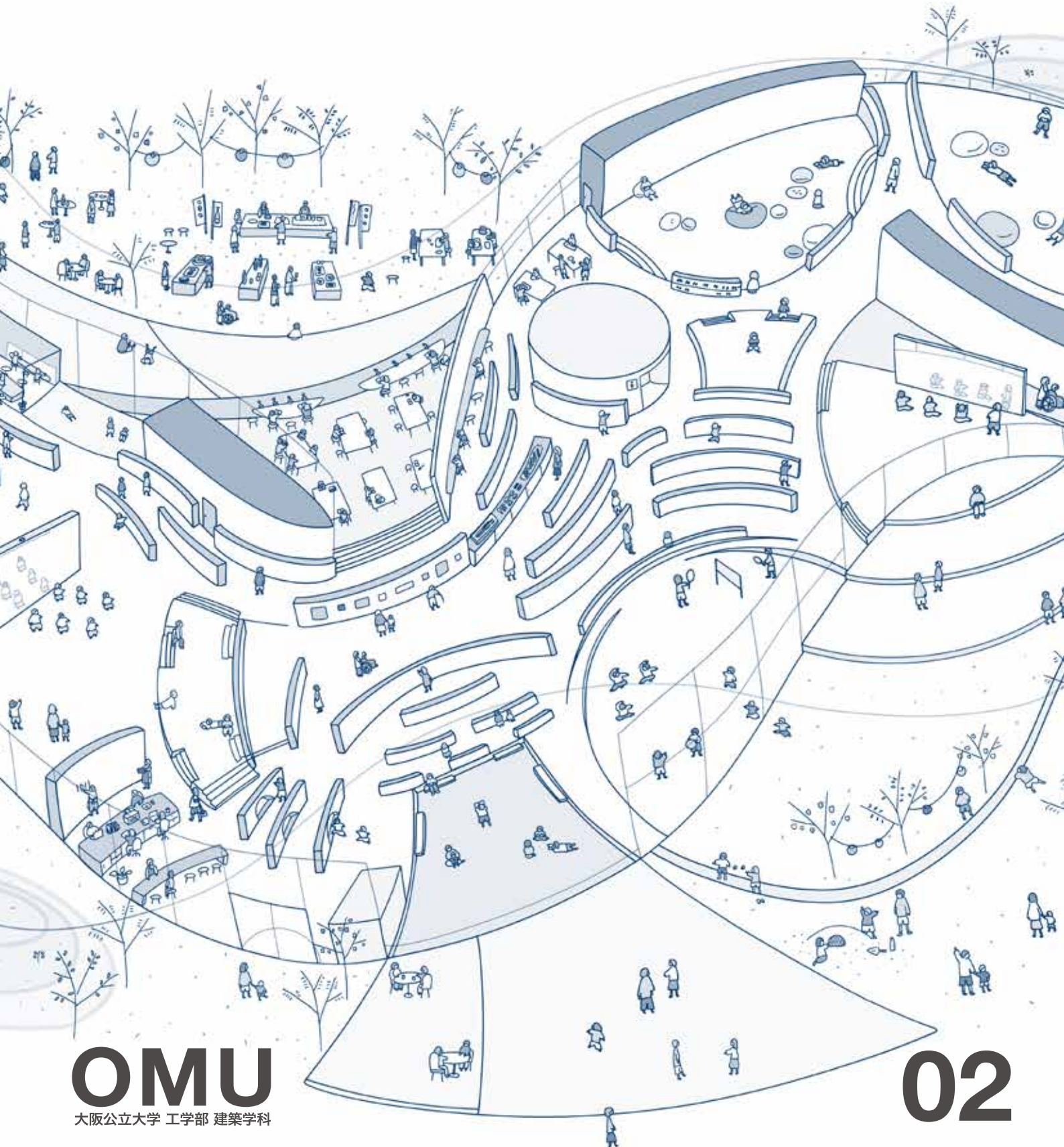


VERTICAL REVIEW

vertical review official book Osaka Metropolitan University architecture 2023 Feb.



OMU

大阪公立大学 工学部 建築学科

02

Presenter_01

鈴木 裕介先生

[建築構造・材料学]

ー建物の強度、いわゆる耐力それと外力の関係をイメージしていますか？

設計課題でその点を考えていますか？認識してほしいという意味ですが、その中で構造材料系の科目のつながりを再認識していただければと思います。

耐力側と外力側がある。外力側でいうと、大きく三つに分かれています。長期荷重と短期荷重があって、短期荷重の中でも、時々生じるものと、まれに生じるものがあります。

長期荷重は建物の重量や、部屋の用途で決まってくる積載荷重です。短期荷重は地震力や風荷重です。地震力でいうと、時々生じる震度は震度５くらいまで、震度６強とかになるとまれに生じる地震として扱われます。この３つの想定外力が設定されており、建物は３つの基準によって担保しましょう。

長期荷重においては使用限界。建物の美観やドアや窓が開かなくなるといった機能性を担保し、短期荷重においては時々生じるものは損傷限界、継続使用が可能となるような状態を担保する。例えば鉄筋コンクリートで言うと、多少ひび割れが入っても、降伏しないというようなこと。稀に生じるものは、建物は損傷するが、破壊まではせず、人



命を守るという基準。これから習う人も、習った人もこの辺りのことを認識しておいてほしい。

これらを学ぶ科目については、力学という土台があって、建築材料学や建築材料構造学実験という材料の特性や単体を学ぶ授業がある。それらを学んだうえで、鉄筋コンクリート構造学や鋼構造学という一般構造学や耐風工学などがあるという認識です。木造建築論はこれらを学ぶ間にあるかなと思います。これらの授業を学んだうえで、建物の強度や想定外力、建築防災防火論を学んでいく。

建築構造材料実験について、知識を学んだうえで、技術に変換しなければいけない。材料に関しては、他大学にはない、特徴的な材料を扱っている。鉄鋼材料や、特殊な製品、土壁、ガラス、瓦、木部塗料、CLTや集成材などから、技術開発、施工も含めて、高本位に開設し、使い方を実演も踏まえ

て教えてくれる。

伝統的な工法になりつつある瓦の講義のなかでは、新しい技術開発を紹介している。コンクリートにおいても、知識を学んだうえで、すぐ使うという流れになっている。材料学の授業で、コンクリートの特性を学び、どの量でどのように調合すればコンクリートが出来上がるか試行錯誤しながら実践する。そのような事を通して、最終的に建物の強度や想定外力を考えることができるように育てほしいと考えております。

Presenter_02

徳尾野 徹先生

[建築計画学]

建築計画・構法研究室の徳尾野です。私は育てたい人というのを少し誤解しながらスライドを作っていたかもしれません。(笑)

ー学部教育の時は「こんな人を育てたい」といながら教育してるわけじゃなくて、建築がいかに多様で面白いのかを知ってほしいと思いながらやっています。

実際にどういう人を育てたいかを考えるのは大学４年の卒論や大学院に来てからの研究を指導するときに考えます。だから、卒論生や大学院生は若い研究者というつもりで付き合っています。

研究者になる人はほんの一部ですが、どういう人を育てたいかと言いますと、今「箱の産業」から「場の産業」へ、人口減少・経済規模縮小により、今の時代に「箱」はいらない。ただし「場」は必要である。場というのはいろいろ活動する場とか、生活する場とか。こういう時代において、設計の概念も今すごく広がっている。

ーこういう変化している時代の建築設計者を育てたいのかなという風に思っています。

人口も増えて経済規模も拡大している時代には箱がたくさん必要。そういう時に私の建築計画の分野では、既にある空間の住み方、使われ方を調査したり、研究する。そこから隠れているニーズ、課題、法則の探求・発見をし、その中からまだ見ぬ空間、構想、プランニング、理論を考える。この時、建築設計者はどういう箱を作るかということを考えていた。

ーそういう時代は終わって、今は「場」の産業。

空き家とか学校の統廃合による廃校、市町村合併によっていらなくなった村役場や市役所などがいっぱいある。それをポジティブに空間資源と捉えて、調査して結果からまだ見ぬ住み方・使い方を構想するという研究方法に変わってきている。この住み方・使われ方というのが非常に大切。spaceからplaceという言い方もできる。今まではspaceをいかにつくるかということから、最近は「place＝場」をどうつくるかという研究に変わってきている。そういうことをやっていると、住み方・使われ方というのは素人も参画できる。まだ見ぬ空間を作るときには素人は参画しづらかった。建築家が図面を引いて、模型を作って、構想をたてていく。そこには素人はほとんど入れなかった。一方で、空き家や空き地があってここでどんなことができるかということは誰でも参加できる。そういう時に建築設計者はどんなことが望まれるかというと、どんな風に住むか、どんな風に使うか、それがどんな効果を及ぼすかを構想する、こういう能力が求められる。それともう一つ、素人が参

加するので、どういう風に取りまとめるか、あるいはどんな風に意見を引き出すか、そういう能力がこういう「場」の時代の産業の構想力になる。

こういう時代の設計者の考え方というのは、使うということを考えて、そこから空間を作っていく。リノベーションなどの改修が多いんですけど、新しく作ることがなくなるわけではないので、新しく作る場合もモニュメンタルな空間・形から作っていくのではなくて、人がどう使うか、人が活躍するステージとか背景をどう作るかも考える。

ーだからもしかすると、建築家というのは縁の下の力持ちのような存在になってくるかもしれない。そういう人たちを育てていきたいという風に考えています。

建築計画は大工も育っている。DIY ワークショップを色々コントロールするような「コミュニティ大工」と呼ばれる人から、国宝の修理をやっている「宮大工」まで育っている。特に意図したわけではないが、こういう訓練をしていくと、どうも大工が育つんじゃないかと最近考えている。その理屈はよくわかっていないので、今後の研究テーマにしたい。だから建築計画研究室に興味がある人は、縁の下の力持ち的建築設計者、あるいは大工、この辺を目指してもらえるといいかなという風に思っています。以上です。



Presenter_03

小林 祐貴先生

[建築情報学]

これは、2010 年の京都大学高松研究室でやっていた展覧会の写真です。祇園にある ASPHODEL というギャラリー1棟全体で、高松研の展覧会を行っていました。1F で卒業設計の展示をして、2F が4 回生前期のスタジオ課題の展示、3F が高松研 OB の方の展示という構成でした。これが4 回生の時に作った尾道の葬祭場ですね。この辺が私が手伝った卒業設計で、京都市役所の裏に新庁舎を建てるという案です。模型は全てレーザーカッターで切り出したパーツでした。この当時京大にレーザーカッターはなくて、外部の模型屋さんで切り出してきて組み立てるという方法をとっていました。組み立てるのも5 人がかりで1、2 週間ぶっ通しでやりましたが、卒業設計の展示には間に合わないという膨大な作業量で、夏のこの展覧会前によく完成したというものでした。

この辺りがOB の展示風景ですね。このようにOB がどんなことをやっているのかを知る機会がありました。この時は畑さんや柳沢さん、中西さんが展示されており、建築家として活躍されているOB の方がたくさんいました。その中で戦っていくことができるのかということが、4 回生でOB の展示を見て思ったことでした。高松先生にも率直に不安感を質問したりしたんですけど、先生が言うにはゴッホもピカソも同じキャンパスで戦ってるや



ろっていう・・・(笑)

逆に不安になることを言われるっていう(笑)
そんなところで育った私が考えることは、

ー**建築×情報を手掛かりに著名な建築家とも渡り合える人を育てたい**

研究室だけでなく、大阪公立大学でやりたいこととして思っているのは、京大では難しいことやできなくなったことを大切にしていきたいということです。その一つとして学科へのデジタルファブリケーション機材を導入して維持を行いました。レーザーカッター1台を導入するだけでも大変で、もっといろんな機材を導入するともっと大変になってしまうので、今のレーザーカッターで十分かなと思っています。

ー**それに加えて、卒業論文、卒業設計両方に取り組むことも大切にしていきたい。**

私は卒業設計しかやっていなくて、修士論文で大変な思いをしました。ですので両方に取り組むということはとても大切なことだなと思っています。私の研究室では都市の学生も受け入れていますが。京大では教員数も膨大で交流する機会はほとんどなかったのですが、本学の場合ではフロアも一緒なので積極的に交流していくのがいいのかなと思います。

ー**レーザーカッターの使用頻度も増えている**

今年度の利用件数は100 件程度でした。デジファブ機材がちゃんと身近にあって、使いこなして、レーザーカッターでこんなことくらい全然できるよねという感覚でいてほしいなと思っています。

ー**修士時代に触れた情報学**

門内先生は「建築学の危機が訪れている、他の分野に淘汰されてしまう」と常々おっしゃられていたことをよく覚えています。デザインスクールを立ち上げて、情報学を中心に建築学、芸術学、機械工学といったところと一緒に新しいデザインを考えていまいしょうということをやられていました。私は修士の時、門内先生ではなく加藤という先生のもとで学んでいました。先生は情報学がメインだったのですが建築学専攻にいらしゃっていて、いろんなことを手広くやられていました。CREST というプロジェクトでビッグデータ時代に向けた革新的アルゴリズム基盤というものをやられていて、私も学生の立場で少し関わる機会がありました。そのメンバーはほぼ全員情報学の専門家です。大阪府大の先生や東大医科学研究所の先生、東北大学の先生もいらっしゃいました。情報学も建築学と同じように多岐に渡っていてひとまとまりではないんですが、こういったプロジェクトを通して他の先生方がどんなことをやっているのかということを知って今に至ります。

ー**現在の研究室での「アルゴリズム理論の基礎」の輪読**

情報というと、ソフトウェアを使いこなすといったことをイメージするかもしれませんが、そうではなくてアルゴリズム自体を正しく理解して、実装できるような学生を育てたいと思っています。あとは建築情報学会というものも始まっていて、建築情報学生レビューというものも行われています。うちの研究室からも数名発表してもら予定です。中には情報学出身で竹中工務店に勤める方などいて、他分野の人が入ってきているなと思います。そういった人たちが現れた時に、こちら側にも情報の知識があって対話ができる学生を育てていきたいと考えています。

Presenter_04

山口 陽登先生

[建築デザイン]

僕は建築設計事務所を主宰していて、建築の設計をすることが仕事です。それから、この大学で教えることも仕事です。

自分は建築家というふうに乗っているのですが、ということは建築家を育てたいということなのですが・・・みなさん建築学科に入って一つ戸惑っていることがあると思います。僕もこの大学を卒業して、大学院を修了しているけれど、その時に大学4 年生ぐらいまではよくわからなかった事がある。

ー**建築士、設計士、建築家。この似たような言葉、誰が正確に定義できる人いますか？**

正確な定義は無いんですけどね・・・みなさん困りますよね。僕-山口は何にあたりますか？大野君。

大野：建築士であり建築家。
山口：お、正解。そういう事なんです。じゃあ伊東豊雄さんだとどうなりますか？
大野：建築士であり建築家。
山口：一緒ですね、建築士であり建築家。では、竹中工務店の設計者はどこにあたりますか？
大野：建築士であり、設計士・・・？
山口：建築士であり設計士・・・違うんです。そうじゃない。

ー**アトリエに行きたいです。つまり私は建築家になりたいです。ゼネコンに入りたいです。建築家になるのを諦めます。そういうわけでは無い。**

建築士というのは国家資格の名前。設計士の中に建築士もいるし、建築家の中に建築士もいる。一級と二級、木造建築士という3 種類がある。設計士と建築家。これは僕の定義の中では全然違うんじゃないかと思っています。
設計士、というのまた素晴らしい仕事で、“今既に目の前に居るクライアント・まちに対して今何が求められているのかということなどを設計することで応える人”という風に定義しています。だから、

建築士を取得して設計士になるというのは、今日の前にいるお客さんに対してベストな回答をしようとする一つの素晴らしい仕事だと思う。ただ、建築家との違いは

ー**“今自分が生きている2024 年よりも前の時代、それと今、未来に向けて建築を作ろうとしている人”それが建築家。**

フューチャーに向かって建築を設計するのが建築家だと僕は思っている。
なので“建築家を育てたい”という言葉の中には、カッコいい建築を作れる人を育てたいという意味は全くなくて、未来に向けて建築を設計する人を育てたいという意味を含んでいます。
では、私と倉方先生の研究室に、建築家になりたい人がきてください、建築の設計演習では建築家になるということだけを目標に建築設計を教えるかというと必ずしもそうではない。
建築の世界には構造・防災・建築構法・・・といった色々な分野があるんですね。だけど、僕もarchitectual design という専門分野に属しているし、みなさんもなんらかの分野に属することになります。ただ、どうしても分野同士の隙間は生まれてくる。

ー**一分野同士の隙間を充填していくような人は重要なのではないか。**

小林先生もまさに、建築の世界の隙間を埋めていくような活動をされているなと思います。つまり、



小林先生のような人を育てたい。(笑)
建築と情報の間を埋めるような人材であり、すごく重要。そこに小林先生がいるかどうかで全部が繋がるかどうかがかかっているわけです。だから、建築家にならなくても別にいいんだけど、未来に向けて建築の世界を充填していく一つのピースになってほしい。

その視点で見た時に、色々な人がいて、一人目は高橋寿太郎さん。建築家のアトリエに勤めたのですが、その後不動産の世界に進み、建築と不動産の間を追求する、隙間を埋めるような活動をされている。
次は川勝真一さん。この方は“建築とリサーチ”の間を埋めるような活動をされている。彼は設計をしないけれども、僕と設計しているというのにほぼ等しい状態にあると言えます。彼も建築の設計についてコメントできる。

3 人目は今村謙人さん。彼は屋台を引いてまちを闊歩しています。建築の世界で何か隙間を埋めたいという思いがあったのだと思います。屋台という動産、建築のような形をしているけれど動いちゃう。そこに止まって唯一無二の世界を作るのではなく自分が動いていく、そういう世界を建築の世界で実現したいということで、彼は活動している。そういう風に、建築の世界で今見えている世界はみなさんにあると思うけど、それ以外のところにも目を向けて様々なことを知った上で、やっぱり建築設計をしたいというのも一つだし、建築は好きだけれど建築の設計じゃないというのも一つだし、色々な選択肢があります。面白い人になってほしいなと思います。以上です。

Presenter_05

谷口 徹郎先生 [建築防災及び風工学]

一育てたい人は一言で、“理論的背景を理解できる人”。

これは、私の講義の大概のシラバスに書いてます。具体的に言うと、建築基準法の風圧力とか地震力なんですけど、こういう風な文字が並んでる。理論的背景を理解するっていうのは、この各文字の意味がわかるとか、それぞれの成り立ちがわかるとか、そういったこと。少なくとも今は別になくなくても、各文字の定義は書いてますので、それを見たときに思い出せば十分かなと思います。それくらいの素養ができればなという風に考えています。

風圧力と地震力を考えるっていう場合に、風が吹いたり地面が揺れると何故建物に力を作用するのかを理解するのはなかなか難しい。特に風の場合は難しいかなと。例えば、2回生の講義では、風が吹いて周りの圧力が変わるから力が加わるんですよという説明をしています。これは、球技なんかされる方は変化球を投げたり、サッカーでボールに変化を与えたりするのと同じ仕組みです。3回生になるとこれが風圧力の方程式の話に発展する。これは解があるかもわからないと言われていた非線形方程式です。これの導出の過程、少なくとも流速と圧力というものが1つの構成則の中で影

響し合いながら変化してるんですってことは読み取ってもらいたい。一方地震の方は、この式さえ分かれば先ほどの建築基準法の地震力まで到達できる。この両者の見た目は全然違う式なんですけど、実は同じニュートンの第二法則から来てる式です。ここまで到達すれば理論的背景を知ったことにはなるかなという風なことです。

山口先生にお話を頂いたときに、ほんまにこのように理解できる人が必要か、とも思いました。理由としては、AI です。AI は僕は怖いと思ってるんですけど、けれど AI の存在は無視できない。AI について調べてみると、“ロボットブルーフ”という言葉が出てきました。

一理論的背景を理解できる人を育てるっていうのは本当にロボットブルーフな大学教育なのか。

ロボットブルーフの提唱者の方が出されている本の副題が‘AI 時代における大学教育の在り方’なんですけど、今回まさにその通り。AI について調べてみると、適応生と自立性一多くの情報から回答を導き出すシステムと偶然発見能力だと。AI で偶然発見能力が備わると聞いてさらに恐ろしくなりました。もう一つは生成性。こちら自立性ということで、どう実装されてるかイメージできなくて、怖いなど。そうは言っても正のイメージを挙げていくと、とにかく明確にスパッと答えを出してくれる。風力・地震力も、例えば杉本町に何階建てのビルを建てたいって言えばパッと答えてくれるとか、結局知

識が全然なくても配筋までちゃんと出してくれるとか。そんな世の中が来るのかなあという風なことを思った。そうになったら理論的背景を理解することなんて重要ではないのかなと暗い気持ちになったんですね。ただ、もう一つ負のイメージもある。世界終末時計が今年は残り 90 秒でしたが、そのリスク要因に AI が入ってる。

一3 年くらい前から、人類を絶滅させる危険要因に AI が挙げられていて、相当怖い。

例えば、みなさんの中にも親の言うことは信じなくても AI のことは信じるみたいな人結構いるんじゃないですかね。もう一つは、理論的ではないということ。なんとなく力技な感じがして、エレガントではないというか、このあたりが嫌いという理由になるんですかね。ひょっとしたら AI が回答は出してくれるけど、なぜその回答が出てきたのか説明するのは苦手なんじゃないかという望みを持ちました。そう考えたんですけど、さっき出てきた式だって実は経験式で、AI だって別に説明できなくても新しい法則を生み出してくれるかもしれないと、またさらに怖さは増したんですけど、そうじゃなければ答えの解説をするという意味で、理論的背景を理解することは今後も重要なかなということです。

一キャップ制に関する質問に対して

また、何故キャップ制が敷かれてるかというのは完全に大学側の都合だと思います。履修者 150 人いて受講者 50 人みたいな世界をなくしたいっていうのがそもそもなので、特にそこに教育的配慮とか望むべきことって一切ないと思います。やっぱり社会なんで、そんなこといっぱいあるわけで、その環境をどう活かすかっていうのはこちら側の話しだと思うんです。その意味で、そのことを全く考えてなかったというのはお恥ずかしい話ですが、やっぱり僕らも何も取れない時間があったりするんで、そこをどう生かしていくかっていうのは考えるべきかもしれないし、でも学生の皆さんがそういう機会があるわけやから、先生に言われなくても、あいてるからこうしようって考えてくれてもいいかなって、言い訳ですけど思いました。

Presenter_06

岸本 嘉彦先生 [建築環境工学]

一「あなたの中の道具箱」

今日は各分野で育てたい人の話をしてほしいということでしたが、僕は学部で特定の設備設計者を育てたいとか、環境工学に特化した人を育てたいという思いはあまりありません。学部の間はいろんな分野を一般的に幅広く学んで土台をしっかり作るのが僕の考えです。例えば、環境だけに特化してしまうと、仮にこの後、大学院に進むなり、会社に入るなりした時に、そこでしか支えられなくなってしまう、非常に視野の狭い人間になってしまいます。

一学部の間均等に学んで、どこかに偏っても堂々と立ち振る舞える人間になってほしい

さて、質問です。「マンホールの蓋はなぜ円形なのでしょうか」というこの質問を知っている人、手を挙げてください。その人たちは話さないでください。これがわかる人はいますか？今、知らないと言った人は考えてみてください。この蓋が四角だったらどうなるでしょうか？四角だと、対角線が一边より長くなるので、蓋が落ちてしまったり、めくれたりすることになります。これは工学的に大問題です。この質問を僕がどこで聞いたかというと、25 年前にアメリカの工学研究科の博士課程の公聴会で、全く関係ない研究をしている人に、教授がこれを訊いたんです。

僕は「東大王」という番組が苦手で、知識が豊富であることは間違いなくっこいいでしょう。しかし、その知識だけが評価されている世の中になっていることに非常に疑問を持っています。

一知っていることとわかることは等しくないし、知らないこととわからないことも等しくない

さらに、「できるかできないか」で分けると、これ考えた時に、知っているからできるとは限りません。世の中には知っていても、できない、わからないという人がいます。これも問題です。さらに、

知らないけど、できる、わかることが重要です。また、「知りません、習っていません、そんなものできません」という態度も問題です。

一大事なのは知っていることよりも、わかること、できることです。僕が育てたいのは、そのような人たち

さっき、徹郎先生が理論的背景を出さなくてもいいのではないと言われた時にドキッとしたんですが、僕はそれが必要だと思っています。知識を一生懸命勉強する時には、それをインプットしていますが、知識はあくまでインプットなのです。大事なのは、それをアウトプットしてどんな結果を出すかです。だから、知恵を育ててほしいのです。僕は学生に対して「顎を鍛える」と言います。得られた情報をどう咀嚼して自分のものにし、栄養にするか、つまり、丸呑みではなく噛み砕く力です。僕が学生の時に先生から「なんや、教科書に書いてあるから正しいのか」と言われて驚いたことがあります。先生が言いたかったのは、多分、教科書に書いてあるから正しいというフィルターで物事を見るな、ちゃんと自分で噛み砕いて、自分の理解にしないかということでした。これはとても大事です。だから、僕の授業を受けたことがあるのは2 回生以上だと思いますが、「こうだ」という教え方はしていません。「なぜそうなのか」「断熱材はなぜ熱を通さないのか」「ガラスはなぜ熱を通すのか」「風が吹くとなぜ涼しく感じるのか」というような、その理由を教えています。その原理がわかれば、応用ができます。



一「道具箱」と言いましたが、知識は道具です。

だから、いろんな道具を持っている方がいいです。しかし、例えば道具箱に、スパナとレンチしかないとしたら、もっと多くのことができるようになります。スパナとレンチしか持っていないけれども、切ったり、立てたりできる人もいます。それは素晴らしいです。しかし、もっと多くの道具を持っていた方がいいでしょう。そこから、使の方は知恵次第で無限大です。みんな、これを鍛えてくださいと強く言いたいのです。

一建築だけでなく、いろんな人が会話を交わし、協力して一つのものを作り上げていく世界です。

正確に伝えること、正確に理解することが大事です。これは反復練習して鍛えるしかありません。そのためには、先輩、後輩、友達、先生、みんなとたくさん話をしてください。わからないことをうまく伝えられないような説明をしても、全てを理解してくれる人がいますよね。そのようなやり取りを通じて、「なぜそれができるのか」ということをずっと意識して学んでいってください。それがとても大事です。その訓練を学生の間にたくさんしてほしいと思います。最後に、みんなそれぞれ才能があります。自分を見捨ててはいけません。以上です。



Program

ショートレクチャー

｜ 藤野高志 | 生物建築舎 / 東北大学准教授

ヴァーティカルレビュー

2 回生第 1 課題 -10mの木の空間 in 杉本キャンパス

｜ 大森 心優 / 久島 はるひ / 島田 みのり / 中島 大耀

2 回生第 2 課題 - まちなかの住まい

｜ 大森 心優 / 向瀬 颯人 / 八木 茉由子 / 島田 みのり / 磯野 愛美

3 回生第 1 課題 - 未来のメディアプレイス

｜ C 班 (門田 怜緯, 郷原 遥斗, 増谷 光紀) / D 班 (大野 岳, 高野 慎也, 鄭 佳恵)

3 回生第 2 課題 - 建築との対話

｜ 遠藤 圭太 / 鄭 佳恵 / 羽田 哲平 / 花岡 凜 / 山下 薫

ゲスト審査委員 | 藤野高志 / 梅原悟 / 橋本健史

Award

受賞者

GOLD PLIZE | 4colors are with books- 大野岳, 高野慎也, 鄭佳恵

SILVER PLIZE | 表裏一体 - 山下薫 / ひとつづきの布で暮らす - 島田みのり

SPECIAL PLIZE | むすんでひらいて - 花岡凜

V E R T I C A L

R E V I E W

2 0 2 3 - 2 n d

大 阪 公 立 大 学 工 学 部 建 築 学 科

2 0 2 4 . 0 2 . 0 8 @ 高 原 記 念 館 学 友 ホ ー ル

Guest Critique

プロフィール

1975.12 群馬県生まれ 2000.03 東北大学大学院 都市・建築学博士前期課程修了 2000.04 清水建設株式会社本社設計本部

2001.10 はりゅうウッドスタジオ 2006.01 生物建築舎設立 2022.10 東北大学准教授

2013. 日本建築学会作品選集新人賞 2017. SD レビュー 2017 朝倉賞 他受賞多数

藤野高志 | 生物建築舎 / 東北大学准教授



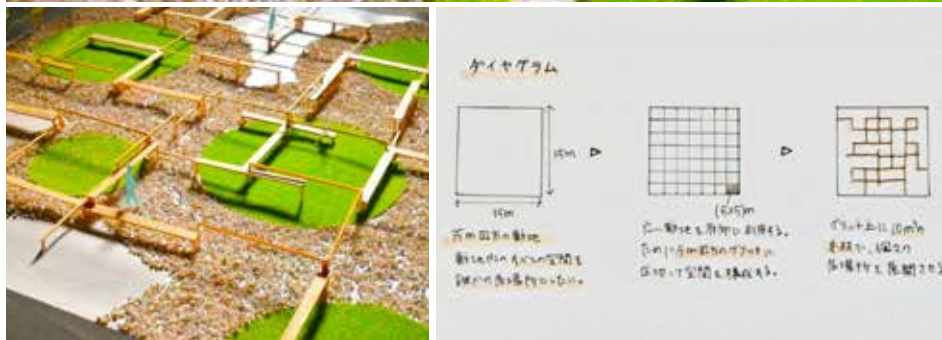
個を連ねて

大森心優

Kohiro Ohmori

学年 | 2 回生
選出課題 | 10㎡の木の空間 in 杉本キャンパス

正方形の敷地を 5 m のグリッドで区切り、線材としての木材を配置する。その上に個が連なり自身の居場所を見つける。配置された木材には、“幅の違い”、“高さの違い”、“地面の違い”、“居場所のグラデーション”といった 4 つの異なる違いがあることによって同じ空間は存在しない。つながりの中で 5 m の程よく遠い距離感のなかに身を投じることで、個人の居場所として認識し、自分だけの居場所です。学ぶための場も、何を学ぶのかも、人それぞれであってよい。それは孤立した違いではなく、連なりの中で見つけてゆくものである。



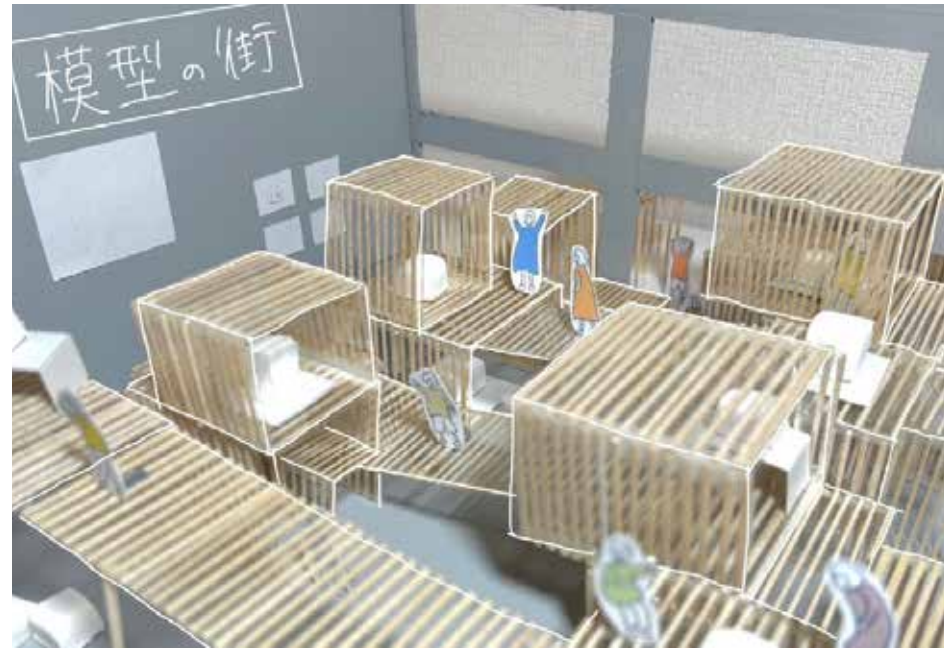
木のキャンパス

久嶋はるひ

Haruhi Kushima

学年 | 2 回生
選出課題 | 10㎡の木の空間 in 杉本キャンパス

思いを描く、木のキャンパスです。大きな目標や誰にも言えない悩み事、絵を描いたり、自由な表現の場となります。そして、そのことばに共感してくれる人や一緒に絵を描き始める人など、思いを可視化することで、この木のキャンパスを通して、人と人がつながります。レベル差や面の向き、場所によってさまざまな過ごし方ができる空間をつくります。



模型の街

島田みのり

Minori Shimada

学年 | 2 回生
選出課題 | 10㎡の木の空間 in 杉本キャンパス

建築学生が思い入れのある模型を持ち寄り、模型を中心に交流する。ここでは、居住環境学科と建築学科の繋がりを生むきっかけを与える“模型の街”。敷地は生活科学部棟に接する工学部 E 棟の一部、RC の大きな吹き抜け空間である。そこに線材を組んだ“木の家”を並べ、模型の街を作る。“木の家”の住民は模型たち。個性豊かな模型たちが集まり、街はどんどん賑やかになっていく。



緩ます境界線

中島大耀

Daiya Nakajima

学年 | 2 回生
選出課題 | 10㎡の木の空間 in 杉本キャンパス

杉本キャンパスは、幅広い学部生や教授、地域の方々など多くの人が行き交う都市型キャンパス。しかし、あまり交流する機会や場所がなく、いつの間にか私たちとの間に薄い壁ができているような気がする。私は、そんな境界線を緩ます空間を提案したい。緩んだ境界線を彷彿とさせる波打つ屋根と、それを支える不揃いに置かれた柱によって、密度の異なる空間を多数生み出す。そして、自分好みの場所を見つけ、そこでしかない出会いによって境界線は緩む。

はこさんの家

大森心優

Kohiro Ohmori

学年 | 2 回生
選出課題 | まちなかの住まい

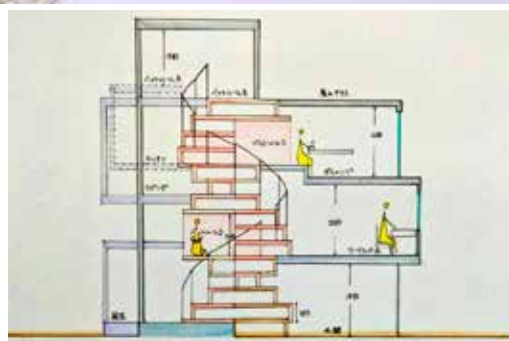
敷地から得られる情報を, 方位に対して読み解いていく.

敷地の形をそのまま縮小した一つの棟に各方位に対して用途を持った「はこ」を差し込む.

南側からの採光, 北東側の桃ヶ池への眺望, 角地特有の 2 方面の道路境界とそれに対する部屋の配置と開口部に関して設計した.

そして, この家の中心を貫く大きく特徴的ならせん階段. 一段ずつが「はこ」として積み重なり, 空間をつなぐ階段という単一的な使い方にとどまらない.

「はこ」に生活を満たしてゆく家となる.



飛び出す家

向瀬 颯人

Hayato Mukose

学年 | 2 回生
選出課題 | まちなかの住まい

桃ヶ池周辺は戸建て住宅が多い閑静な住宅街.

そんな土地に高さ 20m ほどの RC 造の塔を建てる.

塔の上のほうはマチから独立した家族だけ, ひとりだけの空間.

塔の下の方はマチに近く, マチのにぎやかさが感じられる空間.

しかし, ただ同じ空間が続いていてもつまらない.

そこで塔から木造の空間を飛び出させる.

この飛び出しは高いところにもマチに開けた空間, 低いところにもマチから独立した空間を生み出す.



互いに感じあえる家

- 変形空間がうむ地域と住宅, 家族間のつながり -

八木 茉由子

Maayuko Yagi

学年 | 2 回生
選出課題 | まちなかの住まい



変形した敷地をうみだす敷地境界線を用いて内部と外部の空間を決定することで, 地域と住宅, 暮らす家族同士が互いに存在を感じ合い, ともに場と時間を共有できる住宅とする.

前面の道路側にとる軒下空間と開口部や中央の階段は, 家族が時間と場を共有するスペースである空間と地域とのつながりをゆるく仕切る.

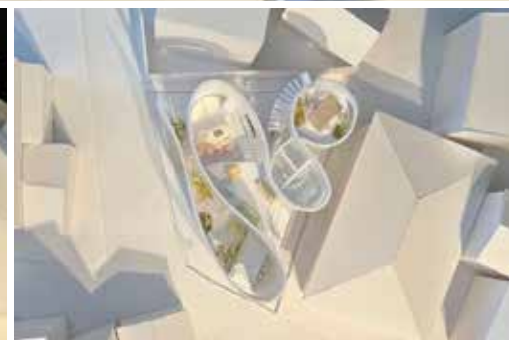
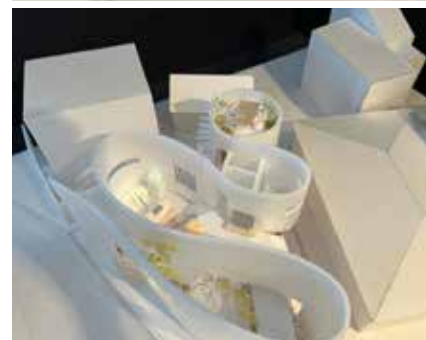
2 階の家族それぞれの空間には壁を設けず床のレベル差で空間を分けることで境界を曖昧なものとする.

ひとつづきの布で暮らす

島田みのり

Minori Shimada

学年 | 2 回生
選出課題 | まちなかの住まい



ひとつづきの布で暮らしの要素を区切り, 折り重ねる.

そのゆるやかに分けられた空間では, 個人と家族, 家族と地域の交流が生まれる. 母が料理をする時, リビングでくつろぐ家族の様子が見える.

道からは家族の生活の様子が少し見え, 家からは行き交う人々と桃ヶ池が見える. そうして, 布を介して地域と繋がり, 布を介して家族がつながる住宅を提案する.

地域に住まい、 地域と育つ。

磯野愛美

Manami Isono

学年 | 2 回生
選出課題 | まちなかの住まい

計画地である三角公園には子どもや学生、近所のお年寄りの人が立ち寄り、三角公園の背景を考慮して地域に開いた住宅を提案する。敷地から台形のボリュームを取り出して、道や桃ヶ池方向に沿って線を入れ、ボリュームを区切り、区切るための線を開口部とした。その開口部が内から外の抜けと外から内への視線によって内と外を繋ぎ、各方向に開いた開口部からは学生や近所の人、北側に設けた坪庭や桃ヶ池公園を楽しむことができる。



こどもの家

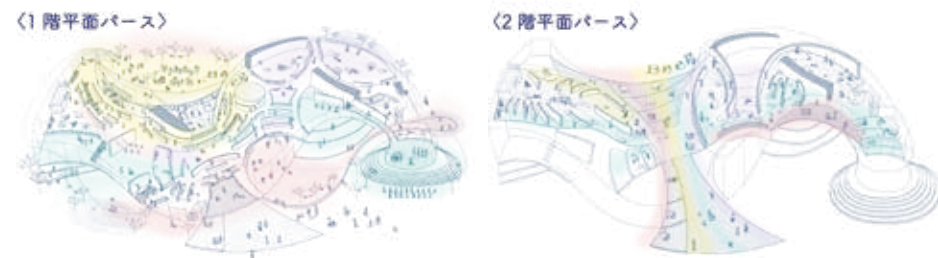
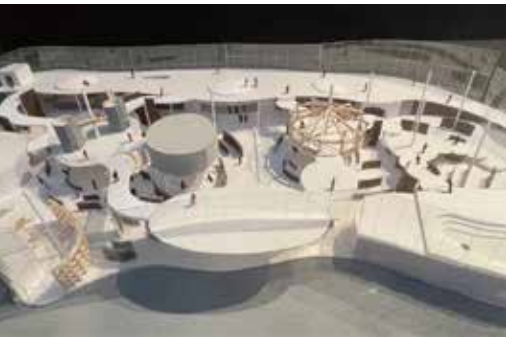
- 第3の - 居場所となる図書館 -

C 班

門田怜緯, 郷原遼斗, 増谷光紀

学年 | 3 回生
選出課題 | 未来のメディアプレイス

岸和田市は全国的に見ても児童数が多く、待機児童という問題に直面している。従来の固く閉鎖的な図書館は、子どもたちに良い影響を与えられていないように思える。子どもたちは明るく自由な図書館であれば、おのずと足を運ぶのではないだろうか。この図書館は子どもたちにとっては児童館でもある。子どもたちの「遊び場・遊具」として本棚やコンタが配置されていき、本棚は想定される動線と2階フロアを構成するための柱に沿ったように設置されていく。子どもたちは行動を制限されることなく、自由な選択を持つことができる。



4colors are with books

D 班

大野岳, 高野慎也, 鄭佳恵

学年 | 3 回生
選出課題 | 未来のメディアプレイス

私たちの生活を豊かにする、
【踊る、奏でる、歌う色】 【作る色】 【遊ぶ、走る、運動する色】 【寝る、くつろぐ色】から空間を考える。
色同士は分立したり、混ざり合って新しい色が生まれたり。
そして、そこに本があったなら ...
【読む色】とは、無色透明な水のようなも。近くの色にはっきりと染まる時もあれば、複数の色に溶け合うような時もある。
本を読む時も、読まない時もある、ここはそんなメディアプレイス。

「結」

遠藤圭太

Keita Endo

学年 | 3 回生
選出課題 | 建築との対話 (杉山家住宅)

重要文化財として指定されている旧杉山家住宅。
それは、時代を超えて保存されるべき建築である。
一方、現在の介護の在り方は、少子高齢化が進んでいるこの国では、時代と共に変化するべきである。
この保存と変化という、対照的な二つの事柄が、結ばれ、解かれる。
縁側を拡張させた新しい空間、「結」によって、旧杉山家住宅がまちに溶け出し、まち全体が介護の役割を担う。
そんな新しいビルディングタイプの施設を提案する。



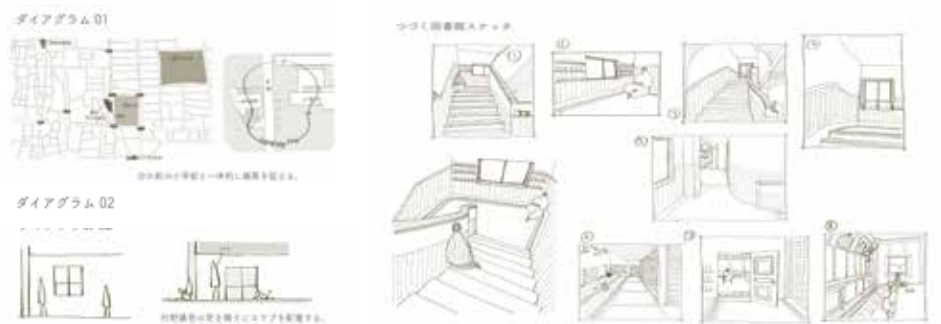
育て、育む。

鄭佳恵

Yoshie Tei

学年 | 13 回生
選出課題 | 建築との対話（杉山家住宅）

村野藤吾の願いは、人と建築とが関係を結ぶこと。二度に渡る大改修や時代の流れによる蛍光灯の薄暗さが印象的な館内や分断した部屋による使われ方は“それ”を過えられていない。一方で、まちの人たちがここ大庄公民館に抱いている愛着も確かであり、それは村野が意識した窓やタイルや石、木などの素材、階段といった現存している豊かさに対してなのである。それらをより建築の中で生かすために増やし、減らし、生かす。村野藤吾の願いの中で大庄公民館が新たな姿に生まれ変わり、人々が建築を育て、建築で育つ舞台となる。



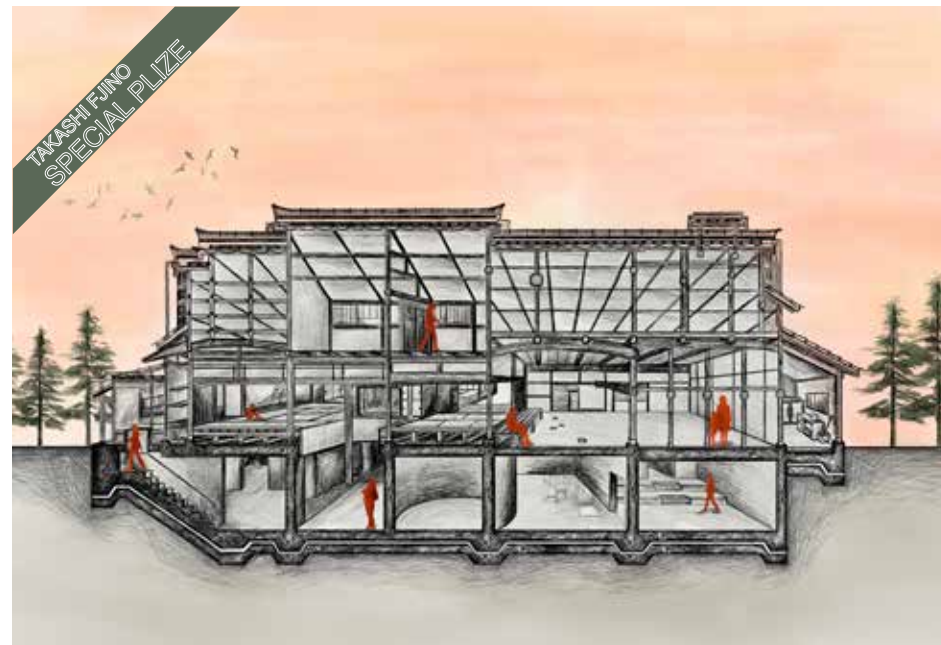
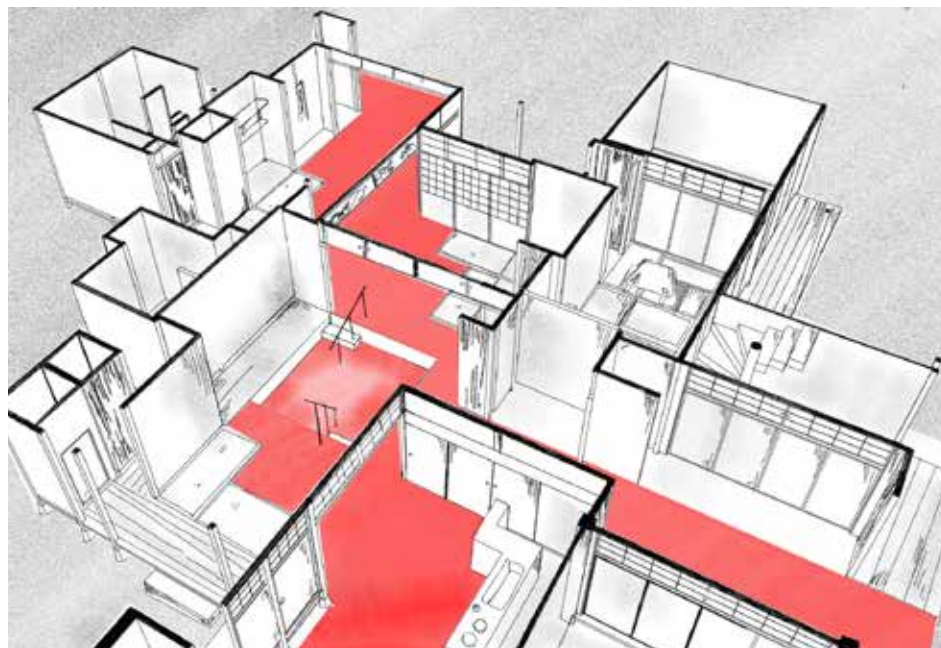
追憶の道しるべ

羽田哲平

Teppei Hata

学年 | 13 回生
選出課題 | 建築との対話（杉山家住宅）

重要文化財として現存する旧杉山家住宅。周辺地域とのかかわりが薄くなり、観光名所として、ただの鑑賞対象となっている現状を、地域住民が集まるたまり場、日常の通過点へと転換する。400年前から存在する土間には手を加えずに保存し、増築を繰り返し動き続けてきた母屋部分に敷居を低くするための道を通すことで、止まっていた歴史に再びエンジンをかける。できる限り既存の部材を尊重し、過去の空間を追憶させつつも、文化財の新たな在り方を提案する道しるべとしての役割を持たせた。



むすんでひらいて

花岡凛

Rin Hanaoka

学年 | 13 回生
選出課題 | 建築との対話（ピース大阪）

十七世紀頃に建てられた旧杉山家住宅。たくさんの方の人生と共に歩み、その暮らしを見守ってきたのでしょう。果たして今はどうでしょうか？文化財となったこの住宅は、住居という機能を失い、時の止まった遺構となりました。昭和 58 年の改修では、家の形を復元しました。令和 6 年、私が復元したいのは、かつてここにあった家と人とのつながりです。日常と非日常を「むすんで」住宅をまちに「ひらいて」

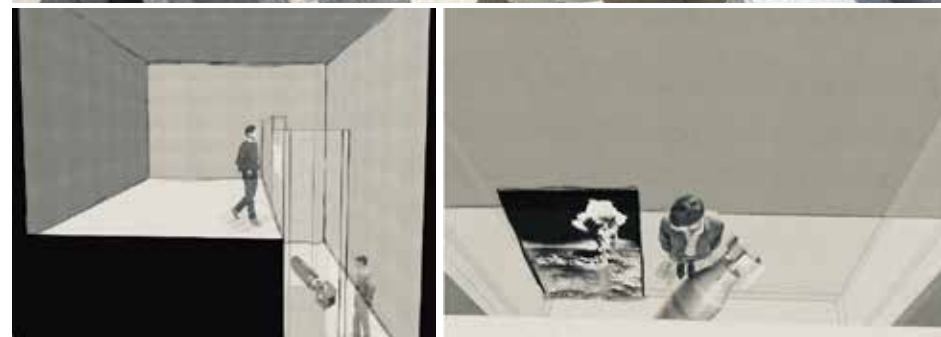
表裏一体

山下薫

Kaoru Yamashita

学年 | 13 回生
選出課題 | 建築との対話（ピース大阪）

現存する平和記念資料館では片方の立場でしか資料を展示していない。争いは立場によって違う主義、主張があり、両方の立場からの資料をガラスブロック内に展示をし、両方を理解することで、真の平和に近づくことができるのではないかと考えた。また両エリアの展示空間を、戦況の優勢によってレベル差や、エリアの広さなどの建築形態を変え、展示内容だけでなく、空間体験が違い、同じ資料を見ても感じ方が変わるような形態にした。





VERTICAL REVIEW

vertical review official book Osaka Metropolitan University architecture 2023 Feb.

Date : 2024 年 7 月 1 日

Publish : 大阪公立大学 工学部 建築学科

Editor : 建築デザイン研究室 - 山口陽登、大山 賢造、矢崎 裕希

Address : 〒 558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本 3-3-138 工学部 c 棟

Mail : designhistory.omu@gmail.com

URL : <https://www.omu.ac.jp/eng/arch/design/>